

知識の自然種論——ひとつの視座

植原 亮 (Ryo UEHARA)

日本学術振興会特別研究員 PD (東京大学大学院総合文化研究科)

本発表の目的は、知識の経験的探求の可能性を示すことによって、認識論の新しい局面を切り開くことである。従来の認識論(分析的認識論)の失敗の要因は、知識の探求が、知識概念ないし正当化概念の明示的な定式化にほかならないとする方法論的前提に求めることができる。この反省に基づくならば、知識の概念的解明ではなく知識そのものの探求が行われるべきだという教訓が導き出されることになる。ここに、「知識の自然種論」が浮上する。それはすなわち、水やアルミニウムなどと同じく、知識は自然の中で成立する対象であり、経験的探求によってその本性が徐々に解明されていく自然種にほかならない、とする立場である。

知識の自然種論の内実を捉えるためには、まず自然種とは何かが明らかにされねばならない。そこで最初に、知識の自然種論者たちが依拠する、自然種を「恒常的性質群 *homeostatically clustered properties*」と見なす R・ボイドの自然種観の骨子を示す。この観点のもとでは、自然種は、一定の因果的メカニズムに支えられることによって、安定した一群の性質集合として出現し、説明・予測を可能にする対象であると理解されることになる。さらに、この自然種観は、経験科学の方法論的制約や歴史的展開とも合致するものである。

次に、こうした自然種観に立脚して知識の自然種論を展開する H・コーンブリスと M・クラークの議論を検討する。コーンブリスは認知行動学の知見を参照し、そこでは知識が、動物行動の説明・予測を可能にする、他の認知状態にはない特有の安定性を示す対象として扱われているということを論じる。クラークは、進化心理学に依拠して、知識を成立させる心的基盤のモデルを示している。両者の議論は、未完成の部分を含んでいるものの、知識の自然種論が研究プログラムとしてきわめて有望であるということを訴えている。

ここで本発表は、概念分析を認識論の中心的方法に据える分析的認識論を動機づけ、それゆえに知識の自然種論への道をふさいでいたものへの検討に移る。私の考えるところ、そのひとつの淵源は、対象の本質が、自然ないし実在の側ではなく、観念や言語のうちに規定されているとするロックの議論にある。ここでロックは、自説の経験的論拠として、現象の非統一性や連続性を挙げ、これらによって自然のうちに対象を種別する根拠が不在であるということが示されていると見る。かくして、ロックは名目的な本質の探究を促すことになるのであり、それによって分析的認識論の背景が形成されていくのである。

われわれはもはや分析的認識論を採らない。とはいえ、それを動機づけていた、現象に見られる非統一性や多様性や連続性は、知識の自然種論に脅威を与えるように思われる。とりわけ、知識や思考様式の文化的・地域的多様性は、知識の理論的統一性

の不在を示し、そこから、知識の経験的探求の可能性に疑いを投げかけるものだと考えられる。本発表では、知識探求の不可能性を提唱するこうした立場を「認識論的ニヒリズム」と呼ぶ。

知識の自然種論は、認識論的ニヒリズムを克服せねばなるまい。そのために、恒常的性質群としての自然種という考え方に立ち返る必要がある。ここでは、恒常的性質群という考えに即して、生物種がどのような自然種であるのかを説明する。その説明を通じ、多様性や連続性の存在が、生物種を自然種として把捉することを妨げるものではなく、むしろ、適応や進化といった生物学上の重要な現象を理解するのに不可欠であるということを示す。そして、恒常的性質群というアイデアを採用するならば、自然種の探求にとって、それを規定する必要十分条件を見出すことにポイントはなく、あくまで経験的理論を構築することが最も重要であると結論できるようになる。さらに、十分な理論構築の結果、なおも多様性や連続性が残るのだとしても、まさに実在がそのような構造を有しているのだと理解することが可能である。

こうした自然種観に立脚するならば、認識論的ニヒリズムを克服することができるだろう。確かに、知識は、見かけの上で理論的統一性を欠くように思われることがあるかもしれない。しかし、このことは知識の経験的探求の可能性を挫きはしない。自然種論者が目指すべきことは、知識がどのような因果的構造の上に成立するのかを明らかにする精細な経験理論を構築することなのである。知識の非統一性の大部分は、探求の進展とともに解消されるであろう。そして、十分な理論構築してなおも、知識という種にともなう連続性やあいまいさを解決する明確な境界性が引けない事例が存在するかもしれないが、しかしそれは、まさに実在のうちでの知識のありようを示しているのである。

最後に、知識の自然種論がもたらす展望についての示唆を瞥見する。知識の自然種論は、進化論的観点に立つことによって、認識論の工学化を促す。というのも、知識がどのような適応的問題を解決するために発達してきたものであるのかを考慮して、はじめて、認識の実相が十全に理解されるようになるからである。また、知識がどのようにして他の能力と協調して行動を導くのか、これを把握することが認識論には不可欠になるだろう。したがって、認識論は心の知性的側面のみならず、情動や直観のような認知状態の解明と相即的に進行する。そしてわれわれは、こうした認知状態が織り成す心という対象もまた自然種として理解されるという描像を手にするのである。